

東日本大震災の教訓をどう生かすか

平成23年3月11日は日本透析医学会（JSDT）理事会の予定日であった。午後4時からの理事会に先立って2時半から常任理事会が開催された直後、2時46分にこれまで体験したことのない激しい、そして長い揺れが会場を襲った。出席者は机の下に身を隠したが机が大きく移動し、度重なる揺れに身を委ねるのみであった。当日はJSDTの理事会に合わせ、日本透析医会、日本腎不全看護学会、日本臨床工学技士会の主要メンバーたちも同じビルで会議中であった。地震がやや収まると、かなり古いビルであった関係もあり、ビルの外に退避するよう誘導された。ビルの外では日本の透析医療を推進するこれら主要なメンバー達が携帯電話のテレビ画面に驚愕しており、立ち話ではあったが、神戸地震を踏まえた今後の被災地透析への対応が急遽協議された。理事会は理事懇談会として今後の震災被災地対策に全力で取り組むことを確認して流会となり、その直後から昼、夜徹しての災害対策活動が始まった。JSDTは危機管理委員会を中心に水口総務委員長が対応窓口に当たり、日本透析医会とホットラインを構築して情報収集、被災地援助、患者避難、復旧・復興支援、避難患者の帰還支援などに取り組んだ。地震・津波に加え、福島原発のメルトダウンに伴う放射能汚染危機（上水道水から放射能が検出された）が重なり、被災地からの集団避難など、過去に経験しなかった多くの出来事にJSDTのみならず、個々の透析医が迅速・的確な対応を迫られた。

辛く、悲しく、厳しい経験ではあったが、我々の務めは何が起こり、どう対応し、どのような結果となり、どうすればよかったのか、何がいけなかったのかなど、得られた教訓を正しく分析し、適切な備え、対応手段を次世代に伝えることにある。

本報告書の趣旨と内容が広く理解され、将来の災害への重要な教訓として活用されることを期待したい。

一般社団法人日本透析医学会

前理事長 秋澤 忠男

(昭和大学医学部内科学講座腎臓内科学部門客員教授)